

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：生活造形学科

資格：教授

氏名：黒田 智子

研究分野	研究内容のキーワード
近代建築論、近代都市論、デザイン方法論	有機的建築、有機的都市、遠藤新、丹下健三、フランク・ロイド・ライト、パトリック・ゲデス、生命感の表現、日本の伝統文化、創作論
学位	最終学歴
工学修士、工学士	神戸大学大学院 自然科学研究科 環境科学専攻 博士課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. インテリア・建築設計（大環3A 後期）の成果の充実に	2018年9月24日2019年1月21日	甲子園会館をホテルとして再生したと仮定し、西ホールをレストランとしてコンバージョンする課題を毎年おこなっている。受講生は、大きなスケールの空間に慣れていないが、西ホールを学生たちと毎年少しずつ実測してきたこと、先輩の作品実例が増えたことなどから、コンセプトに沿って、グラフィックから食器・家具・インテリアまで、単に家具を並べ内装を変えるのではなく、既存空間を読み解き、空間を構成するという本来の視点でインテリアを捉えられるようになってきた。建築家・杉本雅子氏を講評会に招きコメントして頂き、取り組みへの達成感が強まり、空間デザインへの理解が深まった。
2. 実体験ラボの家具・什器の整備と活用	2018年4月1日2019年1月12日	実体験ラボ（H3-B101）の教材整備事業（平成30年特別経費）として、3脚の椅子（サイドチェア（チャールズ・イームズ）、チューリップチェア（エーロ・サーリネン）、エロエス（フィリップ・スタルク））、2台のテーブル（リボリ、アジャスタブルテーブルE-1027（共にアイリーン・グレイ））を整備。学生たちの実物による検討の幅が広がり、モダンデザインに対する理解を一層深めることが可能になった。 基礎製図（短生1CD）および基礎設計・製図演習（大環1ABC）において椅子の実測と図面化の対象が広がった。また、建築設計基礎実習（大環1ABC）およびコーディネート・リフォーム実習（短生1CD）において、家具とインテリア空間とをトータルに構想する際、参照の実例が増えた。近代建築論（大環1ABC）および現代デザイン論（短生1CD）において、現代の椅子がモダンデザインの名作の理念と方法を参照している事実について、より理解しやすくなった。特に、アイリーン・グレイのテーブルは、グレイの専門家・川上比奈子氏をゲストスピーカーとして招き、実物を前にした講義を企画・実施できた。
3. 実体験ラボの家具・什器の整備と活用	2018年4月1日2019年3月31日	実体験ラボ（H3-B101）の教材整備事業（平成30年特別経費）として、3脚の椅子（サイドチェア（チャールズ・イームズ）、チューリップチェア（エーロ・サーリネン）、エロエス（フィリップ・スタルク））、2台のテーブル（リボリ、アジャスタブルテーブルE-1027（共にアイリーン・グレイ））を整備。学生たちの実物による検討の幅が広がり、モダンデザインに対する理解を一層深めることが可能になった。 基礎製図（短生1CD）および基礎設計・製図演習（大環1ABC）において椅子の実測と図面化の対象が広がった。また、建築設計基礎実習（大環1ABC）およびコーディネート・リフォーム実習（短生1CD）において、家具とインテリア空間とをトータルに構想する際、参照の実例が増えた。近代建築論（大環1ABC）および現代デザイン論（短生1CD）において、現代の椅子がモダンデザインの名作の理念と方法を参照している事実について、より理解しやすくなった。特に、アイリーン・グレイのテーブルは、グレイの専門家・川上比奈子氏をゲストスピーカーとして招き、実物を前にした講義を企画・実施できた。
4. 豊中市のふるさと納税返礼品の提案	2017年2月2017年11月	前年度に引き続き、共通のコンセプトに基づき、豊中市におけるふるさと納税に対する返礼品の企画・提案を、ゼミで取り組む。やはり複数の授産施設におけるそれぞれの得意な技術に着目、それらを出し合っひとつの製品を作成するための企画・提案について、指導を行う。2か所の授産施設が得意とする技術を合わせ、小物入れ（革製品）の企画・デザイン・製品化をパッケージデザインも合わせて提案・実施した。
5. 豊中市のふるさと納税返礼品の提案	2016年2月～2016年11月	豊中市におけるふるさと納税に対する返礼品の企画・提案を、ゼミで取り組む。豊中市は、市内在住の市民の寄付が大部分なので、その気持ちを大切に豊中らしさが現れるものを希望している。授産施設の製品を活用、将来的にはその自立に役立てたいとの希望もある。一方、授産施設の生産品と生産状況から、ひとつの施設のみでの返礼品作成は難しいと判断。複数の授産施設におけるそれぞれの得意な技術に着目、それらを出し合っひとつの製品を作成するための企画・提案について、指導

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
6. 鹿児島県鹿屋市と北海道小清水町における農場の調査・見学およびそれを踏まえた卒業論文の指導	2015年9月3日～2015年9月8日	<p>を行う。3か所の授産施設が得意とする技術を合わせたブックカバーの企画・デザイン・製品化をパッケージデザインを合わせて実施した。</p> <p>株式会社JFCとの産学連携において農業の6次化と都市生活の関係性をテーマにしている。背景に国内食料自給の必要性と1次産業のみの生計の困難という日本における社会・経済的課題を問題意識に据える。JFCは、「地産都消」をキーワードに農業の6次化によって経営を展開する。都市の需要に応えた単価の高い作物を生産するために、外国人労働力を導入した大規模農業を各地で展開している。その生産現場を調査・見学する。また、各自治体でのヒアリング、現地図書館での文献調査を行う。2名のゼミ生が参加し、卒業研究としてまとめる。</p>
7. 芦屋山邑邸の見学会における引率と解説	2015年7月26日	<p>意匠学会主催の山邑邸（1924）の見学会で学会の会員・学生（約30名）を引率。大会の会場が甲子園会館であったため、その対比を背景に解説。甲子園ホテル（1930）完成の6年前、遠藤新が南信（当時の所員）と共に共通の師・フランク・ロイド・ライトのスケッチをもとに完成させた。流動的な空間と装飾性の高さについての対比が可能と考え、見学者に興味を喚起するポイントとした。</p>
8. 生涯学習カレッジ リバグレス猪名川町における講義	2015年6月27日、2015年7月1日	<p>兵庫県猪名川町が主催する「生涯学習カレッジ リバグレス猪名川町」の受講生22名に対して、甲子園ホテルの空間的特質を二回にわたって講義。装飾と空間の特徴を、公的空間（ホール・ロビー・外部など）と、私的空間（客室など）に分けて解説。遠藤新（設計者）と林愛作（支配人・取締役と兼務）の意図を織り込みながら紹介。好評により甲子園会館の見学希望が出たことから、翌年の2月に見学会を開催し、受講生らを案内。</p>
9. 講演会「侘茶の素因」の企画・実施	2015年5月2日	<p>生活美学研究所定例研究会において、相川浩氏の講演「侘茶の素因」の企画・実施をおこなう。侘茶を完成させた千利休の師武野紹鷗の「侘」概念を藤原定家の和歌・「毎月抄」、「詠歌大概」に求める内容。学生たちへの還元のため、「現代建築論」（生活デザインコース4年、建築デザインコース3年）の授業を2コマあてる。ともすれば、難解とされがちな古典に親しみ、創作論という視点から定家にも親しんでもらうために、特に二点に力点を置く。第一は、「教寄」と「侘」をめぐる日本の伝統について事前講義、第二は、講演当日において視覚的理解を促すため、PPTを作成・編集。事後には、講演者が、ルネッサンスの建築家の建築論の第一人者であることを紹介し、学問を究めるための姿勢についても考えてもらう。</p>
10. カット野菜の原料生産地についてのB to Bパンフレットの作成	2015年2月～2016年3月	<p>株式会社JFCとの産学連携研究の一環。JFCの卸先（スーパーマーケット）に配布するためのパンフレットの作成。直接目的は、カット野菜の原料となる農作物の産地についての紹介である。教育上の目的は、自然の豊かさをはじめ、景観的特徴や歴史・文化が伝わるようなデザインをおこなうプロセスを実体験することにある。かなりの情報量を整理し、グラフィックとして、親しみやすく、分かりやすく、興味を喚起するものを目指す。対象とした二地域は、土質が類似し、農地の区画が大きい。また、灌漑設備が整備され、大規模農業が可能である。また、強風対策のため防風林を持つ。それらの共通点を視覚的な基盤として、そこに大自然・歴史・文化に関する情報を盛り込むよう指導。ゼミ生2名が参加し、卒業研究としてまとめる。HPのコンテンツとしての役割を併せ持ち、アップを準備中。</p>
11. ミース・ファン・デル・ローエについての講演会の企画・実施	2015年10月3日	<p>生活美学研究所生活デザイン小研究会において、ミース・ファン・デル・ローエ研究の第一人者佐野潤一氏による講演を企画・実施。学生への還元として、担当の「近代建築論」（生活環境学科1年生）の2コマ分を提供。コース分け前の学生に親しみを持ってもらうために、事前に近代建築におけるミースを位置づけを説明する。また、実体験ラボ内のミースによる家具を素材として、インテリアに関する講義を行う。事後には、国外の建築家を対象に研究する場合、実際の作品の空間体験と原著にあたることとが重要であることを改めて説明。国際的に認められた研究者に直接接したことの素晴らしさを理解してもらおう。</p>
12. 遠藤現氏の講演と芦屋山邑邸の見学会の企画と実施	2014年2月25日	<p>生活美学研究所生活デザイン小研究会において、遠藤新の孫にあたる遠藤現氏（建築家）を招く。遠藤は、師・ライトを神とも仰ぎ尊敬していたことから、前半は、ライトの作品、後半は、遠藤の作品を紹介・解説してもらおう。生美研は、学生の教育との接点が少ないため、少しでも学生に教育効果がもたらされるようにとの生美研の方針を受け、遠藤現氏を講師として、見学会を企画・実施。生活環境学科3年生が7名参加。</p>
13. 生活学会での口頭発表の指導	2013年1月13日	<p>ゼミ活動・学科活動の成果をゼミ生がポスターにまとめ、口頭発表することを指導</p>
		<p>1. 生活環境学科4年 加藤絵里、津波啓発サイン計画</p>

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
14. カット野菜の生産についてのHPの作成	2012年2月～2013年3月	<p>2. 生活環境学科4年 郡山菜摘、スーパーマーケットにおけるカット野菜のパッケージ</p> <p>日常に購入する食品として、カット野菜は普及の途上にある。しかし、消費者には、安全安心に関する信頼が確立しているとはいえない。それを達成するために、工場・農場の現場見学に基づいて、HPのコンテンツを提案。農業の6次化を視点とするため、工場(2次産業)と家庭での野菜の洗浄・鮮度の比較、農家(1次産業)での土壌のこだわりなどを中心とした。HPのソフトを最初から使用すると、それによってイメージが制限され固定化する危険がある。そこで、別の表現媒体として仕掛け絵本をモデルとした。また、親しみやすさとして、手書きイラストの採用、カット野菜を使ったレシピの紹介など、参加学生のそれぞれの個性が生きるように構成を含め指導した。2名のゼミ生が参加し、卒業研究としてまとめる。</p>
15. 津波啓発サイン計画	2012年10月2014年1月	<p>西宮市防災危機管理局 防災総括室 災害対策課からの依頼(ボランティア)で、学生有志(着手当時、4年生1名、2年生6名、3年生6名)とともに取り組む。目的は、南海トラフ地震発生後の津波に備えて、市民が日頃から意識を向けるため、人通りの多いところに設置する立体サインである。津波襲来後に警鐘・鎮魂の意味で設置することではないこと、通常の平面によるサインではないことから先例がない難しさがあった。そこで、従来型のワークショップだけで市側の期待する結果を得ることは難しいと判断。原寸大の立体模型を作製し、距離に応じての見え方の違いを実験的に検討したり、設置場所の特徴に対応した内容を考案したりするなど、グラフィックやプロダクトの分野に限るのではなく、生活環境学科の学生が備える能力(生活者の視線の重視・空間的な把握)をできるだけ引き出してもらうように工夫。また、夢や理想を実現することの難しさを、学生と共に乗り越えるように心がけた。2014.3.24津波啓発CUBE完成披露会にて新聞社(毎日、産経、神戸)のインタビューを受ける。</p>
16. カートンのデザイン	2011年4月2012年3月	<p>神戸物産から業務スーパーの商品パッケージとして、ジャガイモ5kgの Karton デザインを依頼される。提案したものが実現する社会貢献の欲があることで、研究室のゼミ生と共に取り組むことにした。各学生のアイデアを、常に全員が共有できるように、計画期間は、学生の持ち回りで「ポテト便り」を編集・配信。値段と量のみをアピールする業務スーパーの寒々しいインテリアに対して、箱が積み重なったときに大地の温もりが伝わるようなデザインを目指すように指導した。好評のため、ジャガイモ10kg、ナガイモ5kg、ゴボウ5kgの Karton を手掛けた。不作のゴボウ以外は、すべて実際の商品パッケージとして実現した。5名のゼミ生が参加し、1名が卒業研究としてまとめる。</p>
17. 防災シールのデザイン	2009年3月2010年7月	<p>大阪府シール組合からの依頼で、ゼミ生と防災のためのシールをデザインした。とっさの事故の際、普段なら冷静に伝えることができる情報(自分のいる場所や、目印になる建物)を伝えることができないことに着目。とっさのときに、読み上げることができ、電話の横に貼り付けるシールを提案。普段は親しめるデザインとなるように、工夫している。学生、シール組合員と共に、大阪府、西宮市に贈呈。</p>
18. シールつき透明付箋の提案	2009年11月2012年3月	<p>大阪府シール組合の依頼で、環境を大切に、とのメッセージ性があり、楽しく使用できるシールつき透明付箋のデザインをおこなった。頁の端に付箋の森が成長する、というアイデアを、シールのもつ特性と結びつけ、パッケージから付箋、シールまでが、ストーリー性を持つことができるように指導。8名の参加学生のうち、1名が製品としての完成までに携わる。</p>
19. 西宮市環境センターのインテリアの提案	2008年4月2010年3月	<p>西宮市環境センターの依頼にこたえ、学生たち(初年度2年生)と共にボランティアで取り組む。エントランス、庭、歩道に看板を、内部階段の蹴上部分に絵を提案。環境センターは、シギ・チドリが飛来する市の自然環境を、小・中学生が体験的に学習することを目指す施設である。子供たちが、親しみと興味をもてるようなデザインとした。また、距離や場所によって、絵やサインも見え方が異なることに注目し、楽しい仕掛けになるように指導した。生活環境の学生の能力を引き出しながら、社会貢献としても役に立つように配慮している。</p>
20. インテリアデザイン・リノベーションを盛り込んだ設計実習科目の提案	2007年4月～2008年2月	<p>生活環境学科の建築デザインコースと生活デザインコースの設計実習は、建築学科と区別がつきにくい、学生たちは、生活造形のインテリアコースにおける課題作品に憧れる傾向がある、などの現実を踏まえ、設計実習関連科目の内容を検討。平成22年度入学生から、建築だけでなく、インテリア、家具、グラフィックなど、トータルな空間デザインを行う科目を、生活行為を基点に提案。同時に、伝統建築、様式建築、近代の良質な建築の素晴らしさを理解する機会とするために、既存の名建築のリ</p>

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		ノバージョンとしての課題を提案、シラバスに反映。これらの科目は、2013年度から実施されている。
2 作成した教科書、教材		
1. 能楽部自演会パンフレットへの寄稿	2018年2月24日	能楽部の顧問として、自演会のパンフレットに「狸々」を寄稿。 1人でも多くの学生に日本の伝統文化である能楽に興味を持ってもらいたいという動機から、謡曲「狸々」について考察している。
2. 実体験ラボの家具・什器の整備（平成28年度 特別経費）9	2017年4月	実体験ラボ内の什器類の整理・整頓のための収納家具を設置。基礎造形実習、生活デザイン演習IIなどの教材をより活用しやすくした。
3. 実体験ラボの家具・什器の整備（平成28年度 特別経費）	2016年4月	実体験ラボの家具・什器は、平成6年度、平成17、18年度に特別経費により提案・整備した。関連授業において、当初の目的を概ね満たしてきた。平成24年度入学の大環生活デザインコース学生のために、生活文化演習II、生活デザイン演習I～IVなど、家具・プロダクト製品に重点を置いた科目が新設された。すでに、建築デザインコースでは、平成20年度入学生から建築とインテリア空間を総合的に学ぶことに重点を置いた建築・インテリア実習I・IIなどの充実が求められ、教育方法において工夫を重ねている。同様の趣旨で、生活デザインコースでは、住宅・インテリア設計、建築・インテリア設計が設けられている。 それらの新たな教育目的に対して、効果的な教育成果を得るための、家具・什器の整備。（進行中）
4. 自由学園明日館の椅子の実測とCAD化	2016年3月	自由学園明日館のテーブル（遠藤新、1923）を実測しCAD化する。ゼミ生1名が協力。インテリア系の演習・実習での活用を目的とする。
5. 甲子園会館のロビーと西ホールの実測とCADによる図面化	2016年2月	甲子園会館のロビーおよび西ホールを実測し、平面図、展開図、断面図をCADにより作成。インテリア・建築系の実習・演習での活用を目的とする。京都工芸繊維大学 造形工学研究科 教員2名、大学院生5名、4年生1名、武庫川女子大学 4年生1名、3年生3名が参加。（平成27年度学内奨励金による）
6. 自由学園明日館の椅子の実測とCAD化	2015年3月	自由学園明日館の椅子（遠藤新、1923）を実測しCAD化する。ゼミ生3名が協力。インテリア系の演習・実習での活用を目的とする。
7. 建築・インテリア設計における教材と課題の作成	2013年9月	生活デザインコースでは、トータルな空間デザインを重視した課題を開始。名建築・甲子園ホテルに触れる機会が少ない生活環境学科の学生たちが、少しでも機会を増やし、空間的にも深く理解してもらえるように、実測しやすい図面教材と、リノベーションのための課題を作成。見学による空間体験をもとに、インテリア空間・家具デザイン・グラフィックデザインを提案するための基盤を提示する。
8. 近代日本の作家たちー建築をめぐる空間表現	2006年1月30日	近代日本の建築、インテリア・生活空間、庭、彫刻など、建築をめぐる空間表現を学ぶための教科書の企画・編集。「作家たちのモダニズム」の姉妹編として、同様の分かりやすさ、親しみやすさを心がけ、読者の興味を喚起するように工夫している。
9. 作家たちのモダニズムー建築・インテリアとその背景	2003年2月10日	近代建築史、デザイン史を学ぶための教科書の企画・編集。近代において、建築・インテリアのデザインをおこなった作家を14人選択し、彼らの生きた時代背景、人生、デザインの理念・方法、代表作品を紹介。自分だったら、どう生きるか、自分だったらどう創るか、考えることができるように編集。ともすれば、難解に感じられる欧米の近代を身近に理解できるように工夫した。
10. CAD/CGシステム	1995年	スタディ・プレゼンテーションの両方に適した教育用の建築系ソフトとして、Form ZおよびMini Cadを、設計・製図用ソフトとして選択。実体験ラボの空間・椅子と連動させ、ヒューマンスケールから発想した空間を描画し検討する。
11. 実体験ラボ”の計画と設計	1993年	インテリアデザインの教育システムについての提案と実施 Development of Education System for Interior Design. Planning and Design for “Real Experience Laboratory” 1. スケール感の育成のための可動天井と可動間仕切りを設置 2. デザインコンセプトについての感覚育成の足がかりとしてのモダンデザインの椅子の中から、建築家がデザインしたものを選択・設置
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 一級建築士	1991年	国家資格（国土交通大臣）
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 教育・研究誌『生活環境学研究第6号』編集事務局代表	2018年4月1日2019年3月31日	教育・研究誌『生活環境学研究第6号』の編集作業。特に、審査論文のため、投稿者と審査者との間のやり取りが公正かつ円滑に行われるように工夫。発行先を再検討し、卒業研究展と同様、教育・研究機関だけでなく、学生の就職先の候補となる企業に送付。
2. 幹事教授	2018年4月1日2019年3月31日	教務、入試広報業務などについての学科長の補佐。新6コース制を高校生と父兄に分かりやすく説明するため、どの学科教員も活用しうるヴィジュアルデータを作成。新6コース制のメリット・デメリットを客観視し教育効果を得るため、特に、英語教育に関して教育経験重視を提言。大学院について、履修便覧、科目担当に関する教務をおこなう。
3. 生活美学研究所研究所員	2018年4月1日2019年3月31日	甲子プロジェクトにおいて、西尾嘉美氏（西宮市郷土資料館）山口静一氏（埼玉大学名誉教授）による講演会を企画・実施。西尾氏には、郷土史の観点から「水の流れがもたらすもの一武庫武庫の川と茅渚の海」、山口氏には、フェノロサと林愛作との関係について「フェノロサをめぐる一林愛作と柳田暹暎」と題しての講演を企画・実施。 生活デザイン研究会において、建築家・西濱浩次氏（（株）コンパス設計工房主宰）にリノベーションの立場から「造る時代から遺す時代に一魅力の再生リフォーム」と題して講演を企画・実施。
4. 教育・研究誌『生活環境学研究第5号』編集事務局代表	2017年4月2018年3月	教育・研究誌『生活環境学研究第5号』の編集作業。論文、論説報告のカテゴリー・ルールを、編集事務局代表の立場から再考・改変。特に、審査論文のため、投稿者と審査者との間のやり取りが公正かつ円滑に行われるように工夫。
5. 幹事教授	2017年4月2018年3月	教務、入試広報業務などについての学科長の補佐。まちづくりコースの新設のために、地域性、リノベーション、分析と提案を組み合わせた実習・演習など、近未来に必要なと考えられる教育のコンセプトをたて、学科教員の意見を調和ある形式で集約し構築、新たなカリキュラム・授業内容を提案する。結果として、6コース編成を議論する始点の役割を果たす。
6. 生活美学研究所研究所員	2017年4月2018年3月	甲子プロジェクトにおいて、西尾嘉美氏（西宮市郷土資料館）林裕美子氏（林愛作の孫）による講演会を企画・実施。その成果を報告書第1号として編集。 生活デザイン研究会において、川上比奈子氏（摂南大学）による「アイリーン・グレイの家具・インテリア・建築デザインの謎」を企画・実施。
7. 学科パンフレットのビジュアル面の提案	2017年4月2018年3月	2019年度から生活環境学科が6コース制となることをから、現3コース制でも工夫を要するビジュアルデザインについて、変更のポイントを提案。
8. 幹事教授	2016年4月1日2017年	教務、入試広報業務などについての学科長の補佐。オープンキャンパスにおける見学者に対して、ヴィジュアルで分かりやすい学科説明スライドを作成した。
9. 学科における過去10年間の教職履修卒業生連絡メールシステムを作成	2015年4月2016年3月	生活環境学科と生活造形学科は、家庭科の免許の取得が可能であるが、毎年教職履修者は、10名前後である。一方、非常勤の募集は、非常に多いことが分かった。そこで、教職課程を履修した過去10年間の卒業生に、教職支援室（現・学校教育センター）の情報をメールで知らせるための仕組みをつくる。（教職支援委員（2013.4-2016.3）をつとめる間の作業。105名にアンケートしたが、情報希望者は5名のみ。）
10. 生活美学研究所研究所員	2014年4月1日～	生活およびデザインの視点から研究会の充実、学生への還元など目標とする。
11. 2014年度卒業研究の提出・展覧会・発表会の方法	2014年2月～2014年4月	卒業研究成果の展覧会と発表会を、学生が主体的に取り組めるように、関係教員と共に従来の学科展との併合と開催時期とを検討。また、主査・副査による、きめ細かな評価によって、学生の能力を伸ばし、充実感が得られる手順と方法を提案。実施については現在進行中。
12. 2014年度卒業研究のための研究室配属の方法の提案と実施	2013年5月～2013年10月	卒業研究のための研究室配属は、従来、丹嶺宿泊研修で学生たちが決めていた。4年間の集大成に取り組むための方法としては、改善の必要があると考え、学生たちが自ら選んだテーマと方法にふさわしい研究室を選択しやすい方法を3年生担任を中心に検討・実施。
13. 教職支援委員	2013年4月1日～2016年3月31日	家庭科教員免許に関わる業務

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
14. 教育・研究誌『生活環境学研究』編集事務局代表をつとめる	2013年4月～	学術性とデザイン性を備えた雑誌を学科から発行するための編集事務の代表をつとめる。学科教員・助手の専門分野が多岐にわたること、業務で多忙であることなどを考慮し、各位の協力を仰ぎ、第1号から各号を年内に発刊。
15. 教育・研究誌「生活環境学研究」創刊号の編集	2012年7月2013年9月1日	2012年7月2013年9月1日 生活環境学科における教育・研究両面の学術的な活動が一望にできるような雑誌を創刊するにあたり、ワーキンググループのまとめ役（編集事務局）をつとめる。構成、内容、スケジュールなどのたたき台と、読者の興味・関心を喚起するためのレイアウト、表紙のデザインの方向性を提示した。審査論文を掲載するにあたり、文系・理系の審査方法の違いを考慮しながら、若い人を育てる趣旨でたたき台を提示。分担者ができるだけ仕事がしやすいように、また、会議・打ち合わせの回数を最小限におさえる配慮を心がける。図書館リポジトリにて、論文ページのみデータを公開。（2014.1.30 ISSNとISSN-Lを国会図書館より取得）
16. 共通教育委員	2010年4月1日2013年3月31日	学科が提供する共通教育科目に関する業務。また、全共通教育科目を対象に、学生たちにわかりやすくアピールするための冊子M's Collectionにかかわる。学生の学生による学生のための冊子として、編集作業に携わる学生たちにアドヴァイスをおこなう。デザインに関わらない学科の学生の割合が多く、コミュニケーションについては、教職員の方との協調・共同を心がける。
17. 教務委員	2007年4月1日2010年3月31日	学科の教務に関する業務。2009年度は3名、2010年度は2名、新任教員を迎えるにあたり、生活環境学科、生活造形学科の担当科目を関係教員と検討。また、大環建築デザインコース、生活デザインコースのカリキュラムの Slim化と履修モデルについて検討。建築士受験資格内容の大幅変更に伴い、履修要綱の建築士受験資格取得科目を見直す。履修要綱の関連ページについて、学生にとって読み取りやすいものに書き換える。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 「くるめがすりの家」よせて一住み手と住宅と建築家と一	単	2011年10月23日非売品	小塩完次記念(財)日本禁酒同盟 資料館 発行、写真と日記で綴る小塩完次・とよ子の禁酒運動 世界連邦運動の歩み、p.63-66	遠藤新(1889-1951)設計のくるめがすりの家 (1931)について紹介している。禁酒運動に生涯をささげた小塩完次・とよ子夫妻の住宅は、夫妻が住む以外に、集会、若い親族の下宿などに使用された。遠藤が、「くるめがすり」と名づけた理由を、カーライルの衣裳論を背景に当時の生活文化に着目しながら、生活と空間の相互関係を考察している。また、遠藤が大切に建築の「佇まい」をもたらす、敷地と建築の関係、建築空間の特徴などを解説している。
2. 遠藤新の建築論における「用」	単	2011年10月	横川公子編・著『生活をデザインする』第6章第2節 収録	遠藤新の「建築論」(1926)に記述された生活と空間の関係を紹介。フランク・ロイド・ライトの弟子が、芸術としての建築に至るために、生活の「用」から設計を考えていること、「用」は平均的に満たすのではなく、重点の度合いを判断すべきだとしていることなどについて解説している。
3. 至上をめざす建築の行者 遠藤新	単	2010年6月1日	白い国の詩、東北電力株式会社、p.5~9	遠藤新(1889-1851)と師フランク・ロイド・ライト(1867-1959)との出会いは、真に偉大であろうとする遠藤自身の意志に導かれたものである。それを基盤に遠藤は、自然に即し人の生活を尊重する自らの建築理念を培い、名作・甲子園ホテル(1930)を実現した。彼の理念は、日本と異質の建築条件である大陸の仕事へと展開した。帰国後は、政権と経済の論理に屈せず、学校建築の多くを東北地方で実現した。
4. 作家たちのモダニズム—建築・インテリアとその背景	共	2002年02月	学芸出版社、PP. 2 18, 19, 70, 71, 73-84, 109-1201 22, 123, 162, 163, 165-176-16, PP. 25-40	黒田智子・小林正子・木村博昭・谷本尚子・川上比奈子・本多昌昭・田所辰之助・廻はるよ・奥佳弥・矢代真己・川島洋一・梅宮弘光・南智子 近代を代表する14人の建築家をとりあげ、時代背景、生涯、理念方法、代表作品に分けて解説。読者が自分とひき比べて、作家としてどう生きるか、作品をどう創るかを考察できるように構成。それによって、現代建築デザインの基盤になっていながら生きた理解が難しい近代建築史・論を等身大から把握することを旨とする。建築からインテリア、家具までトータルにデザインした作家を紹介することで幅広く読者の関心に答えている
5. <CAD/CGによるデザイン教育システム>計画の経緯と概要	単	1995年	情報教育研究センター年報 '95通巻4号	<CAD/CGによるデザイン教育システム>は、'93年度より生活環境学科及び生活造形学科のデザイン教育方法の検討と並行し教育設備の一環として立案され、'95年度文部省私学助成(教育装置)対象事業として採択・実現に至った。本稿では、システ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
6. 団楽記のすすめ 一家族生活の一期一会	単	1987年1月	(法) 大阪市社会福祉協議会主催 懸賞論文：高齢化社会への提案	ムの立案の経緯・背景と必要性を述べ、これをふまえて理念と概要について、教育目標、活用方法および既存教育装置との関係を示し、論じている。全 (p. 51?58) 高齢化社会の家族生活における「団楽」のあり方・役割を、実態調査等をもとに論じる。また、大学における、設計実習の指導において、「両親の10年後の家」をテーマ設定し、10年後のイメージを手がかりに、家族生活の20年、30年、40年後を想定し、住宅を設計するという課題を実施した。その結果の考察を通じて、20歳の女性の高齢化と団楽に対する意識について論じる。(pp. 1~46)
2 学位論文				
3 学術論文				
1. 甲子園ホテルの企画・設計理念の背景 その2 「利他」を視点とした同時代の計画案との比較から	単	2018年	武庫川女子大学 生活美学研究所 甲子プロジェクト報告集第2号	甲子園ホテル(遠藤新、1930)と、甲子園花苑都市におけるホテル(大屋霊城、1926)を、「利他」の視点から、ランドマークとしての特徴および計画・設計の方法について、比較している。それによって、甲子園ホテルには、近代の思想・哲学によって説明のつかない「利他」の建築表現があり、それは、仏教、特に密教的な理念に基づく可能性を指摘している。
2. 甲子園ホテルの企画・設計理念の背景 「利他」と「利己」をめぐる考察	単	2017年	武庫川女子大学 生活美学研究所 甲子プロジェクト報告集第1号	
3. 遠藤新の理念と方法 「第三のもの」についての考察—その1	単	2016年6月発行予定	日本建築学会近畿支部研究発表予定	遠藤新が1926年に発表した「建築美術」における理念・方法の中から「第三のもの」をとりあげ、遠藤が挙げた事例とともに考察する。帝国ホテル設計でフランク・ロイド・ライトのチーフアシスタントを務めて以来の経験から、ライトの作法を自分なりに理解した成果としてとらえると、「第三のもの」の着想は、その発表以前の作品(自由学園明日館の家具(1923)、山邑邸(1924))や記述(「卓と椅子にちなむ」(1923)、「創作の一元(1924)」)に萌芽がみられ、合わせて考察している。
4. 打出の小槌と共に一光と水の建築	単	2016年2月	意匠学会誌 デザイン理論 67号 p. 124~125	平成27年度意匠学会シンポジウム「ライト式建築の諸相の内容を記述・報告
5. 甲子(きのえね)プロジェクト—シンボル・マーク・打出の小槌の意味と背景	単	2016年	武庫川女子大学 生活美学研究所 紀要 第26号	甲子園ホテル(1930)を特徴づける打出の小槌の装飾の意味について、開業当時のパンフレットを対象に読み解く。建築家遠藤新と、常務取締役兼支配人だった林愛作とのコンセプトの共有を前提に、計画・設計理念を考察。甲子プロジェクト構想の基盤となる。
6. 詠歌における心—「有心体」によせて	単	2015年10月1日	生活環境学研究 第3号、p. 22-27	藤原定家の『毎月抄』における「有心体」について、和歌創作における理念・方法として考察した。『毎月抄』は、和歌を詠む心とその結果得られる和歌の質についての記述である。創作論として読み解くことで、衣服・インテリア・建築にも援用可能ではないかと仮説を立てた。茶道における「侘」概念を立てた武野紹鴎が、古今伝授を受けるほど打ち込んだ和歌から「侘」概念を得ていることが研究の背景である。同じく定家の『詠歌大概』、『近代秀歌』を合わせて考察し、和歌の本質と役割、詠歌および古歌を学ぶ心構えなどについて考察した。さらに、『明月記』の参照によって、恋の歌が多い定家ではあるが、その実体験よりも、むしろ、より上位と考えられる次元(天台仏教などが関連か)での「心」の観察とそれと並行する実践経験が基盤ではないかとの結論を得た。
7. 「空間の醍醐味」について—遠藤新からみた帝国ホテルの空間的特質—	単	2014年9月	生活環境学研究No. 2, p. 12-21	遠藤が、帝国ホテルを建築として初めて包括的に論じたのは、1936(昭和11)年に発表した「帝国ホテルの増築に就いて」である。この中で、芸術としての建築の空間的特質を「空間の醍醐味」と名づけて論じている。本研究では、この特質について、過去の遠藤の記述や関連文献資料を参照しながら、遠藤の考えを整理し考察する。 遠藤が「帝国ホテルの増築に就いて」を記述するに至った経緯として、4年後のオリンピック開催に向けて帝国ホテル側が発表した増築案の内容と背景を概観する。「空間の醍醐味」については、遠藤がとりあげた宿泊客の感想と、建築家としての遠藤自身の考えについて検討する。後者については、建築空間のすべての寸法を人間に合わせた尺度で統一的に決定する「スケール」について考察する。また、全体から細部に至る建築の形態を、建築の構成要素の

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
8. 津波啓発サインのデザインプロセス—津波啓発サインのデザインプロセス	共	2014年9月	生活環境学研究No. 2, p. 46-51	<p>関係性によって決定する「建築的構成」について考察する</p> <p>西宮市災害対策課との官学連携で、武庫川女子大学生活環境学科黒田研究室所属学生8名と有志の学生7名で取り組んだ「津波啓発サイン」のデザインプロセスを報告している。このサインは、450mm角のキューブを5段に積んだ立体サインである。東日本大震災の津波被害を教訓とし、南海トラフ地震が起こった場合、それに伴う津波に備えて、市民の防災意識を喚起し高めていく（啓発する）ことを目的とする。大学側は、完全なボランティアという立場で取り組んだ。</p> <p>2012年11月、ワークショップという形式で開始し、2013年2月、武庫川女子大学案を西宮市に提出した。しかしながら、それを受けて西宮市が作成した案に、サインとして、情報提供の観点から問題がみられた。そのため、年度を超えて大学側が継続的に関わることになった。研究室では、問題がみられる理由として、立体であるにもかかわらず、立体としての検討が十分ではないことが原因ではないかと考えた。そこで、西宮市案の原寸模型を作製し、問題解決の方向を検討した。さらに、原寸模型で大学案を作成し、2013年9月に大学側の最終案を西宮市に提出した。ほぼ、それにそうデザインで、2014年3月、立体サインが設置された</p>
9. 甲子園ホテルの装飾的特質—打出小槌に着目して	共	2014年6月	日本建築学会近畿支部研究発表会梗概集	<p>1930年代は、日本的なものとしての建築表現が探求され、鉄筋コンクリートの壁面と瓦屋根を組み合わせた帝冠様式が建設される一方で、茶室や数寄屋に着想を求めた作品がみられる。関東大震災以降の耐震耐火、景気の不安定と世界的な不況、大陸における日本の支配地の拡大などが、1930年に前後する建築への社会的要請の背景としてあげられる。</p> <p>人の心を導く建築を目指した遠藤にとって、ライトの設計理念・方法に対して自らの独自性を打ち出す苦心は、同時に、そのような時代の要請に対する自らの回答の探求であったと思われる。甲子園ホテルでは、20年代までのライトの理念・方法を継承・展開しながら、自分なりの日本性の表現を試みた。それは、装飾性を包括した独自の空間表現となっている。本稿では、甲子園ホテルの空間構成を支える装飾的特質について、主に打出の小槌のモチーフについて考察している。</p>
10. peta*peta—シール付き透明付箋のデザインプロセス	共	2013年9月	教育・研究誌 生活環境学研究No. 1 p. 10-15	<p>生活者に環境問題に目を向けてもらうためのメッセージの発信を意図した透明付箋シールのデザインプロセスを報告している。付箋、シール印刷の歴史を概観し、既製付箋の現状に触れ、課題を挙げるとともに機能・役割を見直した。それらをふまえて、シール付き透明付箋「peta*peta」とそのパッケージのセットを提案している。透明付箋を使用するたびに、生活者の日常生活にエコメッセージを浸透させるデザインアプローチは、他への応用可能な方法である。</p>
11. 柳宗悦による軸装の清新と升目の書にみる他力の美	単	2010年1月10日	芸術工学会誌 50号刊行記念特別号	<p>大阪日本民芸館開催の「茶と美—柳宗悦茶を想う」に学生を引率。その際、特に印象に残った柳による掛軸について、「點茶心指」の意味、柳にとっての心傷、さらに原稿用紙に書を書く行為について考察した。</p>
12. 甲子園ホテルに関する研究—設計図の変遷から空間構成の意図を探る	共	2010年	平成22 年度日本建築学会近畿支部研究発表会梗概集 p. 793-796	<p>甲子園ホテルを特徴づける空間構成について、設計者遠藤新（1889 - 1951）の意図を、現存する図面から明らかにする。</p> <p>現在の甲子園ホテルを観察するだけでなく、ホテル計画時～竣工された当時までに遠藤新が実際に描いたか、または指示して描かれた設計図を対象に、遠藤の空間構成の意図を読み解いていくことが、この研究の目的である。</p> <p>遠藤新は、甲子園ホテルに関してそれほど多くの言葉を残していない。しかしながら図面の変遷をたどることで、遠藤が語らなかつた意図が見えてくるのではないかと考える。図面は、ホテル計画初期（1928（S3）年）から竣工直後（1930（S5）年）の間に描かれた、3種類の図面を研究の対象とする。</p>
13. 甲子園ホテルにおける水の表現—西翼部装飾的特質	共	2010年	平成22 年度日本建築学会近畿支部研究発表会梗概集, p. 797-800	<p>遠藤新（1889 - 1951）の設計によって1930年に竣工した甲子園ホテルは、1920年代に日本に受容されたモダニズムに対して、歴史主義と共通する様式性と装飾性に特徴がある。遠藤は、フランク・ロイド・ライトの右腕として帝国ホテル（1923）の実施設計を担当したことで知られる。その経験を踏まえて甲子園ホテルでは遠藤独自の展開を試みたと思わ</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
14. 遠藤新の建築論における基本的特質 I—中央銀行倶楽部における大陸性と日本性—	単	2010年	武庫川女子大紀要 (人文・社会科学) Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., 58, 99-106 (2010)	れる。例えば、ホテルのシンボルとして「打出の小槌」を用い、それをモチーフとした装飾が建築の内部・外部から食器に至るまでに施された。モチーフの選択はホテルの立地に由来するといわれ、「打出の小槌」を持つ大黒天は豊作、金運、富貴、長寿などを司る。ホテルが結婚式場としても用いられたこと、経営上の成功などを考え合わせ、ホテルの守り神にふさわしい。しかしながら、甲子園ホテルの装飾は、単に「打出の小槌」のみによるとはいえない。例えば、壁面を覆うテラコッタ・タイルや石彫のレリーフは、円と正方形を基本モチーフとした意匠である。ライトの作風を思い起させるこれらの装飾は、屋根の緑釉瓦と調和して、完成度の高い様式性を示していると思う。 これらの装飾に遠藤が込めた意図を、装飾の配置と形態の特徴から読み解くことが本研究の目的である。甲子園ホテルは、ほぼ左右対称の平面と立面を持つが、全く同じではない。その差異を重視し、本稿では、主として西翼部の装飾について考察する。
15. The Methodologies of Metabolism in the 1960s: Organic City in Japan - Megastructure	単	2002年7月	International Planning History Society 10th Conference (CD ROM)	Endo's concept for Chuo-ginko Club to clarify his original method, which might be different from his master; Frank Lloyd Wright's one and might deeply connect with the traditional Japanese aesthetic theory. Organic city is an ideal city model presented as the common concept of Metabolism, which was Japanese avant-garde movement in the 1960s, in order to respond flexibly to city needs which were changing swiftly and rapidly. In this thesis, I will divide methodologies, proposed by Metabolists for the purpose of realizing an organic city, into two groups and call each of them megastructure and group form. The Metabolists developed megastructure to realize the order of city space from an architectural to gigantic scale. In megastructure, they dealt with an architecturally composing scale or factor as a subject of their design: those scales or factors included for instance, architecture, city, and sometimes even country. The Metabolists explained the effectuality and possibility of megastructure by using an analogy of the growth and transformation of an individual cell division. I will examine the organism of megastructure by focusing on a living thing.
16. 火を主題とする祭事の道立てについて -京都の盆行事を中心に-	単	1992年11月	日本インテリア学会 第4回大会研究発表梗概集 (1992) (pp. 68-69)	祭事の場の構造化に関する研究のための基礎的資料の作成という位置づけで、本稿では京都市内における盆行事の中で特に火を主題的に用いたものを取り上げ、祭事の場を構成する道具立ての内容について、用いられる道具の種類・特徴やそれらを用いた演出的なプロセスなどに着目して整理・考察を行う。
17. 祭事の場の構造化に関する研究	単	1991年11月	日本インテリア学会 第3回大会研究発表梗概集 (1991), pp. 4-5	祭事が内包する諸相を〈内容〉と〈形式〉という2つの視点から捉え、祭事が現出する場の特質を構造的に解明するために行った調査事例と分析結果を紹介している。
18. 関西の祭事の研究—序—	共	1991年03月	建築と社会 72通巻828号、(1991)、pp. 108-115	大森 智子、久村宗憲、田中康、藤木真、宮野道雄 関西での祭事を調査対象とした本研究では、祭事の形式的側面に着目し、空間を特徴づける諸要素の構成を〈空間・道具・演出〉という3方向から抽出している。
19. オフィス・プレジャー	共	1991年02月	建築と社会、72通巻827号、(1991)、(pp. 29、42)	大森 智子、石倉健彦、大橋真由美、加藤力、神谷剛、北浦かほる、駒田哲男、西川純一、福田由利、増池秀夫 ワーカーの感性を近年配慮する傾向にあるオフィス・インテリアを〈空間の機能〉・〈空間の装備〉・〈行動と心理〉という3側面から分析し今後の動向を探っている。
20. 住宅計画における団らんのバラエティと公室系空間の平面構成の関係に関する研究	単	1987年12月	日本建築学会 大会学術講演梗概集 (近畿) 1987年度、pp. 5089-5090	住宅の公室系空間においては、食後にくつろぐという行為以外に、年中行事、通過儀礼、季節、好み、趣味等に関わり様々なスタイルの団らんが考えられ、それぞれ家庭生活の安定に寄与しているといえる。これらの団らんが公室系空間の構成にどのように関わるのかを明らかにする為、実態調査の分析結果をもとに特に生活行為と空間の構成・室数に着目し考察を行なっている。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
21. 居住構造の研究 -- 脇町の居住構造その1～その4	共	1985年10月	日本建築学会 大会学術講演梗概集 (東海) 1985年度、pp. 811～812	重村、山崎、大森 (黒田)、伴丈、久元、岩井 地域における居住構造を明らかにするため、徳島県脇町の実態調査をもとに、その居住特性と地域構成、集住パターンの地域特性、宅地・敷地利用の地域特性、脇町の居住動向と居住関係、居住動向から見た町営住宅の役割、地域定住サイクルと、住宅・環境ストックの活用課題等について考察を行なっている。 分担大森 (黒田)
22. 脇町地域住宅計画 (HOPE計画) 策定調査研究報告書	共	1985年03月	建設省 pp. 7～23	HOPE計画策定委員会、策定幹事会 脇町地域計画の骨子として、第一に、住宅ストックの改善計画を軸とする地域定住サイクルの実現、第二に町並の再生、保存を位置づけ、その概要、それに基づく住宅政策と住宅計画、脇町としての、“魅力づくり計画”、HOPE計画実現のための“行動計画”が提案、報告されている。 分担大森 (黒田)
23. 住宅計画における公的空間の意味・目的についての計画論的考察その1、その2	共	1984年10月	日本建築学会 大会学術講演梗概集 (関東) 1984年度	住宅計画においては、以前のnLDK理論では説明のできない事象問題が多く見られ、特に公室系空間における生活行為の多様さは、公室系空間をL、Dという概念で語ることを困難にしている。本研究では実態調査をもとに、社会・文化的生活行為に関わる潜在的住生活要求を、空間のどのような構成・性状がひきうけているかを考察している。(pp. 1065?1068)
24. C. AlexanderのThe Timeless Way of Buildingにおける諸概念について	単	1983年06月	日本建築学会近畿支部 研究報告集1983年度、pp. 657～660	C. Alexanderの著書The Timeless Way of Buildingより、彼の設計方法論における最上位概念であるThe Quality without a Nameとその実践手段としてのパターンランゲージの本質的特性の解明を試みている。
25. (修士論文) The Timeless Way of BuildingにおけるC. Alexanderの設計方法論についての考察	単	1983年02月	京都工芸繊維大学	The Timeless Way of Buildingを全訳し、主要概念を考察、分析し、副論文として、A Pattern Languageを随時参照することによって、C. Alexanderの設計方法論の解明を試みている。特に第I部では主要概念の分析を、第II部では実践手段の検証を行なっている。(pp. 1?367)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 甲子園ホテルの企画・設計理念の背景 その2 -- 「利他」を視点とした同時代の計画案との比較から	単	2017年	武庫川女子大学 生活美学研究所 甲子プロジェクト報告集第2号	
2. 打出の小槌と共に一光と水の建築	単	2015年7月25日	第57回回意匠学会大会シンポジウム「ライト式建築の諸相」	甲子園ホテルの装飾の中から、打出の小槌をモチーフとしたものを取り上げ、そのバリエーションと配置された空間の特徴を対比して紹介。また、食器・パンフレットなどにトータルでシンボルをモチーフとして用いることは、師・ライトの帝国ホテルにも実現できなかったこととして指摘。それを踏まえて、パンフレットのグラフィックな特徴を読み解き、装飾と地域の文化や時代の出来事との関係を設計者・遠藤新の独創性として紹介した。
2. 学会発表				
1. 甲子園ホテルの設計理念と背景- 「利他」からみた密教との関係について	単	2019年9月3日	日本建築学会2019年大会梗概集	建築家が「公共」にふさわしい表現を真摯に追求しても、その記述を公表することが難しい場合がある。建築家自身の精神世界が根差す宗教・信仰、あるいは、それらを自らが所属する社会が容認するかどうかなどの時代性が要因となる。1930(昭和5)年に完成した甲子園ホテルの場合、設計者・遠藤新(1889-1951)は、会心の作の設計理念について、ほとんど言葉を残していない。本稿では、学生時代から交流のあった支配人兼常務取締役・林愛作(1873-1951)との関係に着目し、他者を利する「利他」を視点に天台密教との関係について概観する。密教の教義や境地を、一般の在家に言葉で伝えることは、禁じられているからである。さらに、甲子園ホテル完成の翌年が満州事変(1931)であったことを考えると、迎賓館としての日本的建築表現のために遠藤が苦慮した側面があったのではないかと思う。以上を前提に、遠藤の建築理念と密教との関係を考察する。
2. 甲子園ホテルの装飾の特質2 テラコッタタイルとその配置	単	2019年6月22日	日本建築学会近畿支部2019年度研究発表会梗概集	甲子園ホテル(1930)の壁面を覆うテラコッタタイルは、日華石の彫刻や緑の瓦屋根と共に格調高い装飾性を担っている。正方形のタイルに描かれたレリーフによる装飾は、四角形をモチーフとしている。同じ形状の角を4つ合わせ、4枚を1組として配置することによって、新たに十字形パターンが浮かび出るように工夫されている。設計者・遠藤新(1889-1951)は、キリスト教を信仰し、建築を通じて社会改革と世界平和を目指したこと

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
3. 遠藤新の卒業論文“Description on City Hotel Design”についての考察	単	2018年9月6日	日本建築学会 大会学術講演梗概集(東北)	<p>から、テラコッタタイルが形成する十字形パターンには十字架としての意味を含めた可能性が指摘できる。</p> <p>一方、甲子園ホテルは、教会ではなく世界の賓客が宿泊するホテルである。当然、それにふさわしい建築表現が求められた。当時において、それは、明治期に定められた国家神道に抵触しないことが絶対条件であった。これらを前提に、本稿では、テラコッタタイルとその配置に着目して装飾としての特徴と意味を考察する。</p> <p>建築家・遠藤新(1889-1951)の卒業設計‘City Hotel’, (1914)は、『建築家遠藤新作品集2』(1991)に掲載されているが、卒業論文の掲載は無く、表題・内容ともに未確認だった。遠藤の母校である東京帝国大学(現・東京大学)建築学科の図書館で、卒業論文“Description on City Hotel Design3”(1914)を、閲覧することができた。</p> <p>卒業論文からは、遠藤が、自分なら新しい帝国ホテルのためにどのような建築を設計するか、この時点で相当具体的に想定して取り組んだことが推察される。本稿では、卒業論文の内容と構成を概観し、特に敷地設定と平面計画について帝国ホテル支配人・林愛作(1873-1951)との関係を考察する。</p>
4. A Comparative Study of Two Hotels from the Perspective of “Altruism” - Development Plans of the Koshien Area in the 1920’s	単	2018年7月18日	International Planning History Society, 18th Conference, Yokohama, Kanagawa, Japan	<p>This paper compares Koshien Hotel of Arata Endo (1889-1951) with the proposed hotel in the Koshien Kaen City Plan of Reijo Oya (1890-1934) from the perspective of “altruism. First, I will examine the two hotels from the viewpoint of the customer target and the possible activities related to the features of the architecture. Next, I examine them from the viewpoint of the relationship between the hotel and the surrounding environment. The two sites are in such contrast to each other with Oya’s site at the south, facing the bright spacious ocean, while Endo’s hotel stands in a dense pine forest facing a clear pond. Endo rarely expressed his views in writing but seems to have considered the pond when planning the shape and design of Koshien Hotel.</p>
5. 甲子園ホテルの宴会場における空間構成と装飾の関係 その2 一前室から庭へとつながる豊穡の水の流れの表現一	単	2018年10月21日	日本インテリア学会大会梗概集	<p>設計者・遠藤新(1889-1951)を招聘した支配人兼常務取締役・林愛作(1873-1951)が、アーネスト・フェノロサ(1853-1908、遺言により三井寺(天台宗)に埋葬された)と深い親交があったことや、遠藤の妻の実家の宗派と遠藤自身の菩提寺が天台宗であることを合わせ、甲子園ホテルの打出の小槌は、天台密教とその護法善神・大黒天の「利他」にまで遡って大黒天を象徴するのではないかと考えるに至った。そのような視点から、当時の国内の社会状況や外交方針を背景にインテリア・建築空間を読み解くと、「西の迎賓館」といわれた甲子園ホテルには、家にいるようなくつろぎを伴った「空間の分かち合い」など、異文化の尊重と世界平和を祈る独創的な空間表現が見出せた。</p> <p>このことを前提として、本稿では、「豊穡の水」による「利他」の物語が、甲子園ホテルの西翼宴会場とその周辺にどのように表現されているのかを、空間と装飾を視点に考察する。</p>
6. 甲子園ホテルの宴会場における空間構成と装飾の関係 一天井周辺の形状と打出の小槌をモチーフとした装飾に着目して一	単	2017年	日本インテリア学会大会梗概集	
7. 遠藤新と野田俊彦による「建築論」の比較 芸術としての建築をめぐって	単	2017年	日本建築学会大会梗概集	
8. 遠藤新の理念と方法 「第三のもの」についての考察—その1	単	2016年6月25日発表予定	日本建築学学会近畿支部	<p>日本建築学学会近畿支部研究発表 遠藤新が1926年に発表した「建築美術」における理念・方法の中から「第三のもの」をとりあげ、遠藤が挙げた事例と共に考察する。帝国ホテル設計でフランク・ロイド・ライトのチーフアシスタントを務めて以来の経験から、ライトの作法を自分なりに理解した成果としてとらえると、「第三のもの」の着想は、その発表以前の作品(自由学園明日館の家具(1923)、山邑邸(1924))や記述(「卓と椅子にちなむ」(1923)、「創作の一元(1924)」)に萌芽がみられ、合わせて考察している。</p>
9. 甲子園ホテルの装飾の特質—打出の小槌に着目して	単	2014年9月	日本建築学会大会(神戸大学)	<p>人の心を導く建築を目指した遠藤にとって、ライトの設計理念・方法に対して自らの独自性を打ち出す苦心は、同時に、時代の要請に対する自らの回答の</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
10. Study on the Relationship between the theory by Ebenezer Howard and by Kenzo tange -The Growth of City and the People's Life	単	2014年7月22日	International Planning History Society, 16th Conference, St. Augustine, Florida, USA	<p>探求であったと思われる。甲子園ホテルでは、20年代までのライトの理念・方法を継承・展開しながら、自分なりの日本性の表現を試みた。それは、装飾性を包括した独自の空間表現となっている。本稿では、甲子園ホテルの空間構成を支える装飾の特質について、主に打出の小槌のモチーフについて考察している。（同年6月に近畿支部で発表予定だった内容について整理した）</p> <p>“A Plan for Tokyo” by Kenzo Tange in 1961 was represented for the capital city Tokyo, of which population should be positively accelerated to be 10,000,000. On the other hand, “Garden Cities of To-morrow” by Ebenezer Howard in 1898 was represented for the city of 30,000 populations, to reduce the peoples' inflow to London.</p> <p>Both Tange and Howard used the word growth when their city model got more population, gave the life model to the people who added the city population and observed the character of the city which attracted the people .</p> <p>In this paper the theory of Tange and of Howard will be compared from the following points.</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. The order of the growth of city 2. The direction of urban life of people 3. The organization of city 4. The role of city for nation
11. A Study on the Concept of Theory for City Planning by Kenzo Tange - The relationship between the Highest Value of the City and the People's Life	単	2012年7月18日	IPHS 15th Conference, Sao Paulo, Brazil	<p>“A Plan for Tokyo 1960” is only the one theory which Tange used the metaphor of living things. Then we can get the question: How Tange got the organic city model for “A Plan for Tokyo 1960” and why he get rid of it? “Life” must be the highest value of the city, if we use the organic living city model. So we can reach the next question: How relate the “highest value” of the city to people's “life”? I should like to exam this question on “A Plan for Tokyo 1960”, refer ring to “The regional structure and architectural form in large cities” (1951) and “The future image of Japan Peninsula? The Construction forward the Twenty First Century” (1966) written by Tange.</p>
12. The Role of the Women in Masque of Learning	単	2010年7月14日	IPHS 14th Conference, Istanbul, Turkey	<p>The aim of this paper is to exam the role of the women in the Masque of Learning, focusing the first and the very successful one realized by more than three hundred volunteers including many women in Edinburgh in 1912. The materials of the research are “Cities in Evolution” (1914) and the pamphlets, the papers and the books mainly published by Out Look Tower since 1900 until 1915.</p>
13. 衣・食・住育の<コト>・<モノ>・<空間>	単	2010年1月10日	芸術工学会誌 刊行50号記念特別企画号、p.83	<p>食博覧会・大阪（2009年4月29日～5月10日、インテックス大阪）において、武庫川女子大学のブース展示が大学として初めておこなわれることになった。ブースのサインおよび空間のデザイン、販売する弁当のパッケージデザインなどに、ゼミ生・有志の学生と取り組んだ。その内容について紹介。</p>
14. 甲子園ホテルに関する研究—設計図の変遷から空間構成の意図を探る	共	2010年	平成22年度日本建築学会 近畿支部研究発表会	<p>甲子園ホテルを特徴づける空間構成について、設計者遠藤新（1889 -1951）の意図を、現存する図面から明らかにする。</p> <p>現在の甲子園ホテルを観察するだけでなく、ホテル計画時～竣工された当時までに遠藤新が実際に描いたか、または指示して描かれた設計図を対象に、遠藤の空間構成の意図を読み解いていくことが、この研究の目的である。</p> <p>遠藤新は、甲子園ホテルに関してそれほど多くの言葉を残していない。しかしながら図面の変遷をたどることで、遠藤が語らなかつた意図が見えてくるのではないかと考える。図面は、ホテル計画初期（1928（S3）年）から竣工直後（1930（S5）年）の間に描かれた、3種類の図面を研究の対象とする。</p>
15. 甲子園ホテルにおける水の表現西翼部装飾の特質	共	2010年	平成22年度日本建築学会 近畿支部研究発表会	<p>甲子園ホテルは、1920年代に日本に受容されたモダニズムに対して、歴史主義と共通する様式性と装飾性に特徴がある。例えば、ホテルのシンボルとして「打出の小槌」を用い、それをモチーフとした装飾が建築の内部・外部から食器に至るまでに施された。モチーフの選択はホテルの立地に由来するといわれ、「打出の小槌」を持つ大黒天は豊作、金運、富貴、長寿などを司る。ホテルが結婚式場としても用</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
16. Comparison of the Image of People's Lifestyle in the City According to City Theories of Patrick Geddes and Kenzo Tange	単	2006年12月13日	IPHS 12th Conference, New Delhi, India	いられたこと、経営上の成功などを考え合わせ、ホテルの守り神にふさわしい。しかしながら、甲子園ホテルの装飾は、単に「打出の小槌」のみによるとは言いがたい。例えば、壁面を覆うテラコッタ・タイルや石彫のレリーフは、円と正方形を基本モチーフとした意匠である。 Patrick Geddes and Kenzo Tange both presented an organic city model, with the city as an analogy of a life force, illustrating each and everyone's life style image. In this research, both creator's city life images that hint at the Value of their city models are compared, with their differences analyzed. Referred works are Geddes' "Cities in Evolution"(1914) and Tange's "A Plan for Tokyo, 1960"(1961)
17. The Methodologies of Metabolism in the 1960s - The Theory and the Practice of the Model of Organic City in Japan	単	2002年07月	The 10th International Planning History 10th Conference, London, England	I will discuss the methodologies of Metabolism as follows:□(1) the common concept of organic city, compared with the urban condition;□(2) each methodology as the way of solution to the urban problems; and□(3) the main works from the viewpoint of the effect of the methodologies.
18. Metabolism in Japan in 1960's	単	2000年12月	Werkstatt für Kulturgeschichte Kolloquium für Architektur-und Kunstgeschichte für Forschende und Interessierte	Metabolism could be seen as both the presentation of Japanese identity in 1960 and the Japanese avant-garde movement in 1960s. The background of it is discussed from the viewpoint of the political, economic and urban problems. The direction of each methodology is estimated from the requirement of urban living at that time.
19. 祭事空間の仮設配置と「しつらい」の意味 その2	単	1996年08月	日本インテリア学会	「しつらい」（及び「しつらう」）の表記の整理・検討を行うことを目的とする。意味・内容を参照したのと同じ辞典から、仮名及び漢字表記を取り出し、「しつらい」及び「しつらう」について同様の作業を行っている。また、これらの辞典類が参照する古辞書、辞典についても同様の作業を行っている。さらに、各字義についても、「大漢和字典」における記述を要約し整理している。
20. 祭事空間の仮設配置と「しつらい」の意味—辞典類における語積をめぐって—	単	1995年10月	日本インテリア学会	伝統的祭事の際に一時的に立ち現われる空間は、装飾・道具・建築等を仮設的に配置することで成立している。本論ではこれらの仮設配置に相当する語として「しつらい」を取りあげ、その意味、内容を明らかにすることを目的とする。いわゆる定説の整理という立場から、辞書・辞典類における「しつらう」及び「しつらい」の語積を収集し、先に「しつらう」について整理・分類し、これをふまえて「しつらい」について考察する。
21. 諸研究にみる〈祭事〉概念 菌田稔による祭の構造論 A Study on Concepts about Saiji in the Researches of Related Field On Structure of Maturi in Miouuru Souada's Articles.	単	1993年11月	日本インテリア学会第5回大会研究発表梗概算 第5巻 Summaries of the 5th Annual Conference of Japan Society for Interior Studies.	祭事の空間的特質を建築学的に分析する立場からの“祭事の〈場〉の構造化”という研究テーマにむけて、他の関連専門分野における適切な方法論の参照・援用を目的としている。文化人類学、民俗学等において、総体として祭事を捉え、祭事自体の構造を提示したり、場・空間に言及しているものが見られ、その中から菌田稔を取りあげ、構造概念について整理、検討を行なっている。特に“表象の構造”について“祭儀”と“祝祭”の2局面の様式特性、表象、様相、作用等を考察する。
3. 総説				
1. 建築的形態の生成—始点としての椅子	単	2015年5月	芸術工学会誌 68号 2015年5月 p. 57	自由学園明日館のテーブルと椅子は、遠藤新が1923年にデザインした。帝国ホテルの設計を終えたのとほぼ同時期である。椅子の座面のデザインが、同じく遠藤の「建築美術」（1926）の「第三のもの」の事例として用いた図と類似していることに着目し、椅子のデザインについて考察を行った。
2. 藤戸石—三方院庭園にて	単	2015年5月	芸術工学会 2015年5月 p. 56	醍醐寺三方院の庭には、名物と言われる石が数多く配置されている。特に、名物として名高い藤戸石は、庭の空間構成の核とされる。藤戸石の来歴から、戦国武将が愛でた理由を考察し、それに基づいて、曼茶羅を参照したとされる庭の構成の意味について考察した。
3. 桜の香の蜜に魅かれて	単	2010年1月10日	芸術工学会誌刊行50号 記念 特別企画号、p. 64	西宮商工会議所を通じて取り組んだ産学連携において、事業者である養蜂家からのヒアリング、養蜂場の見学、提案したラベルデザイン実現の顛末などの体験をまとめた。
4. 宗悦による軸装の清新と升目の書にみる他力の美	単	2010年1月10日	芸術工学会誌刊行50号 記念 特別企画号、p. 78	大阪日本民芸館開催の「茶と美—柳宗悦茶を想う」に学生を引率。その際、特に印象に残った柳による掛軸について、「點茶心指」の意味、柳にとっての心偈、さらに原稿用紙に書を書く行為について考察

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3. 総説				
5. オフィス・プレジャー	共	1991年2月	建築と社会、72通巻8 27号、(1991)、(pp. 29-42)	した。 大森 智子、石倉健彦、大橋真由美、加藤力、神谷 剛、北浦かほる、駒田哲男、西川純一、福田由利、 増池秀夫 ワーカーの感性を近年配慮する傾向にあるオフィス ・インテリアを〈空間の機能〉・〈空間の装備〉・ 〈行動と心理〉という3側面から分析し今後の動向 を探っている。
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
1. フィールドワーク	単	2014年7月		アメリカの以下の都市を調査・見学 1. セント・オーガスティン（フロリダ） 2. フランク・ロイド・ライトの一連の作品 ・オーク・パークの住宅、シカゴのオフィスビ ル、タリアセン・イースト（アトリエと住宅）
2. フィールドワーク	共	2012年7月		ブラジルの以下の都市の調査・見学 1. ブラジリア 2. サンパウロ 3. クリチバ（パラナ州）
3. フィールドワーク	単	2009年		アイルランドの以下の都市で調査・見学 1. ダブリン（パトリック・ゲデスの関係資料収集 ） 2. タラ
4. フィールドワーク	単	2007年、200 8年		スコットランドの以下都市で調査・見学 1. グラスゴーにて、パトリック・ゲデス関連資料 およびチャールズ・レニー・マッキントッシュ関連 資料を収集 2. エジンバラにて、パトリック・ゲデス関連資料
5. フィールドワーク	単	2006年		インドにおいて以下の調査見学をおこなう。 1. プバネシュバルおよび近郊都市（オリッサ州 ）のヒンズー教寺院 2. チャンディガール（パンジャブ州、ハヤリーナ 州）のル・コルビュジエの建築作品 3. デリーおよび近郊のマーケット（クラフト）
6. フィールドワーク	単	2004年7月		バルセロナにおいて以下を調査・見学 1. アントニオ・ガウディの建築作品 2. 海岸の現代建築群 3. 中世・近代の街並
7. フィールドワーク	共	2004年		E. ハワードが計画しR. アンウィンが設計した田園都 市・レッチワースの調査・見学
8. フィールドワーク	共	2000年		ギリシャ・ローマ時代の植民地遺跡を、リビアのサ ブラサ、アポロニア、ベンガジ、トリポリ、ラピス マグナにて調査
9. フィールドワーク	単	1997年		オスマン朝のイスラム寺院の内部空間の特質を、イ スタンプール、ブルサ、エディルネにおいて現地調 査
10. フィールドワーク	共	1995年05月		下賀茂神社・流鏑馬神社における場の変容について のフィールドワーク A Fieldwork of Yabusame-Shi nji in Shimogamo Shrine
11. フィールドワーク	共	1994年09月		下賀茂神社・式年遷宮における場の変容についての フィールドワーク A Fieldwork of Shikinen-Sengu [] in Shimogamo Shrine
12. フィールドワーク	共	1994年09月		上賀茂神社・鳥相模における場の変容についてのフ ィールドワーク A Fieldwork of Karasu-Zumo []] in Kamigamo Shrine
13. フィールドワーク	共	1994年07月		下賀茂神社・御手洗祭における場の変容についての フィールドワーク A Fieldwork of Mitarashi-Fest ival in Shimogamo Shrine.
14. フィールドワーク	共	1994年06月		上賀茂神社・夏越祓における場の変容についてのフ ィールドワーク A Fieldwork of Nagoshi-no-Harae in Kamigamo Shrine
15. フィールドワーク	共	1993年8月		火を主題とする祭事における場の変容に関するの調 査：花背の松上げ及び久多のちゃちゃんこ踊り（花 笠踊り） A Field work of Saiji with a Thematic Fire “Matsunage” of Hanase and “Chachanko” o f Kuta
16. フィールドワーク	共	1993年08月		下賀茂神社・矢取の神事における場の変容について のフィールドワーク A Fieldwork of Yatori-no-Sh inji in Shimogamo Shrine
17. フィールドワーク	共	1992年10月		鞍馬の火祭における場の変容についてのフィールド ワーク A Fieldwork of Fire Festival in Kurama
18. フィールドワーク	共	1992年08月		花背の松上げ行事における場の変容についてのフ ィールドワーク A Fieldwork of Matsuage in Hanase

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
19. フィールドワーク	共	1992年05月		下賀茂神社・切芝の神事における場の変容についてのフィールドワーク A Fieldwork of Kirishiba-no-Shinji in Shimogamo Shrine
20. フィールドワーク	共	1992年		下賀茂神社・葵祭における場の変容についてのフィールドワーク（境内内） A Fieldwork of Aoi-Festival in Shimogamo Shrine (1992年・1993年5月)
21. フィールドワーク	共	1992年		上賀茂神社・葵祭における場の変容についてのフィールドワーク（境内内） A Fieldwork of Aoi-Festival in Kamigamo Shrine (1992年・1993年5月)
22. 「世・界・祀」	単	1990年11月	「游女の都市」建築展 出展 大阪展 東京展 掲載：《Design & Architecture icon 1991-1》	立体 オブジェ A_2 パネル1枚
23. BLUE & YELLOW CHAIR	単	1988年02月	イヌヤ商会家具デザインコンペティション	A 1 サイズ1枚
24. LANDSCAPED WITH THE WIND	共	1987年12月	第7回ホクストン建築装飾デザインコンクール	A 1 サイズ1枚
25. KIRICCO-AGEHA & RABBIT	単	1987年01月	P/A 7th Annual International Furniture Competition	(508×762) 1枚
26. AGEHA & RABBIT	単	1986年12月	SAPORITI ITALIA DESIGN COMPETITION	A 3 サイズ2枚
27. KIRICCO	単	1986年11月	ひろしま家具コンペティション	B 1 サイズ1枚
28. SACRED-COMMON (ベスト50)	単	1986年01月	P/A 6th Annual International Furniture Competition	(508×762) 1枚
29. WEAVING THE NEW BANLLEUE INTO LIFE	共	1984年05月	日仏新建築設計競技 (PAN13J) Plan Construct et Habit主催 Program Architecture Nouvelle Competition 掲載：《都市住宅1985. 6》	A 0 サイズ1枚 A 1 サイズ4枚
30. 駒ヶ根市文化公園施設案	共	1984年03月	駒ヶ根市文化公園施設群公開設計競技 掲載：《設計競技応募作品集》《新建築1984. 7》《建築文化1984. 7》	A 1 サイズ4枚
31. 地場産業振興のための拠点施設 (3等)	共	1982年11月	日本建築学会主催設計競技 掲載：《建築雑誌1982. 2》《新建築1982. 2》《建築文化1982. 2》	A 1 サイズ4枚
32. ANBI SOFA	単	1982年04月	第1回アルフレックス国際デザインコンペ (ベスト50)	A 1 サイズ1枚
33. 肢体不自由児のための養護学校 (入選)	共	1981年11月	日本建築学会主催設計競技 掲載：《建築雑誌1982. 4》	A 1 サイズ4枚
34. 共に成長する家具	単	1981年09月	「大日本印刷主催木製家具コンペティション」 掲載：《室内1981. 9》 (2等)	B 3 サイズ3枚
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 甲子園ホテルの企画・設計理念の背景 その2-「利他」を視点とした同時代の計画案との比較から	単	2018年	武庫川女子大学 生活美学研究所 甲子プロジェクト報告集第2号	甲子園ホテル（遠藤新、1930）と、甲子園花苑都市（大屋霊城、1926）とを「利他」を視点に、都市および建築設計の各側面から比較している。それによって、甲子園ホテルにおける「利他」の建築表現には、西洋近代の思想・哲学では説明のつかない「利他」の設計理念が存在し、それは天台密教に依る可能性を指摘している。
2. 遠藤新の卒業論文“Description on City Hotel Design”-1914年に描いた理想のホテルの理念と背景	単	2017年10月	武庫川女子大学 教育・研究誌『生活環境学研究第5号』	遠藤新の卒業論文（英文）が卒業設計“City Hotel”のための調査分析の成果とコンセプトをまとめたものであることを解明。まず、東京帝国大学の教育環境を考察し、それを踏まえ、遠藤の思考の独自性について考察。特に、スケール、インテリア、宿泊客に対する視点、最新のホテル情報、動線計画などが、帝国ホテル支配人であった林愛作とのかなり緊密な交流から生まれたという結論を得る。また、仙台第二高等学校時代からの読書、教育環境が多きく影響していることを指摘。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
3. 甲子園ホテルについての遠藤新による短い記述をめぐって	単	2013年9月	教育・研究誌「生活環境学研究」p. 58-61	遠藤新（1889-1951）の設計による甲子園ホテル（1930）は、遠藤の自信作であり代表作と考えられる。ところが、甲子園ホテルについて、遠藤が自らの考えを語る文章は意外なほど少ない。竣工の年に発表された「甲子園ホテル」（1930）、「甲子園ホテルについて」（1930）、4年後の「椅子・テーブル」（1934）、最後が「甲子園ホテルの場合」（1936）で、いずれも作品の一面を断片的に記した短文である。 遠藤ほどの文章力があれば、甲子園ホテルについてのまとまった記述を残すことは十分可能だったと思われる。したがって、遠藤の記述が、かなり断片的であること背景には、そうなるだけの理由があったととらえることができるだろう。それらの記述が書かれた背景と考え合せ、短文の理由と内容の関係について考察する。
4. 津波啓発サインの提案	共	2013年1月13日	道具学会研究発表フォーラム	2012年度に官学連携で取り組んだ、西宮市津波啓発サイン計画について報告している。津波啓発サインとは、南海トラフ地震にともなう津波にたいして、市民の防災意識を喚起し育成する（啓発）ことを目的とする。先例がないため、研究室と学生とが工夫したワークショップ取り組みとその成果を考察している。
5. グループ討論 時間のヒューマンスケール「もの」・「こと」・「とき」の関わりの中で	共	2007年10月	芸術工学会 春季大会（東京）記録号 第44巻、p. 24-28	（鈴木成文、大井尚行、他）大テーマ：「芸術工学再考 デザイン領域の拡大と芸術工学（デザイン学）の果たす役割」に対する討論会。アールブリュットの表現とモダニズムにおける建築表現との本質的な違いとは、という問いは、モダニズムの社会性に光を当てるのではないか、建築家に依らない建築や境界に素晴らしい空間があるのはなぜか、などを討議。
6. 古代から近代までのヨーロッパの人体モデル及び中国の風水説における人体の捉え方を整理・考察	単	1995年		実体験ラボを活用したヒューマンスケールからの発想を重視したデザイン教育のため
7. スタディ・プレゼンテーションの両方に適した教育用の建築系ソフトを一年間にわたり検討・選択	単	1995年		Form ZおよびMini Cadを、設計・製図用ソフトとして選択
8. パネルディスカッション からだとくらしの環境学 たべる・よそおう・つたえる	単	1994年	学院創立55周年記念 明日をひらく武庫川女子大学 シンポジウム特集	
9. テーマセッション「祭り」	共	1992年	ファッション環境学会 第1回大会シンポジウム 掲載：《ファッション環境Vol. 2-2》	
10. シンポジウム “なぜ「遊女の都市」か”	共	1992年	「遊女の都市」建築展 シンポジウム、日本建築協会主催	
6. 研究費の取得状況				
1. 空間デザイン論研究室の甲子プロジェクト	単	2019年6月	公益社団法人 兵庫県建築士会	甲子園開発地の景観調査を行い、甲子園ホテルの立地や建築との関連性を考察する。結果を、現在のまちの魅力として地域に認識され、まちづくりのイベント等に活用されるようにまとめる。 甲子園開発地（旧枝川沿いの開発地）は1924年に甲子園球場を完成した阪神電鉄が、「なんでも日本一」の理想を掲げて1930年「西の迎賓館」甲子園ホテルを開業すると共に整備した住宅地。今回、同地における自然及び歴史的景観要素とその魅力を、歩行者の視点から調査し、まちの魅力を発見したい。
2. 甲子園ホテル・帝国ホテルの比較研究	共	2019年4月	日本インテリア学会期限付き研究部会	甲子園ホテル（1930）の外観を特徴づける2本の塔は、設計者である遠藤新（1889-1951）によれば、水平性に対する垂直性の「破調」によって、建築に、環境との「完全なる調和」を与えるという。現在、これらの塔は、密教の護摩法要に用いる仏具の意味と形式を与えられているのではないか、という結論に至っている。そこで、ランドマークとして、塔の形態構成、仕上げ、装飾について、その特徴を実測・観察によって分析する。また、塔は、煙突として、暖炉とそれを包括するインテリア、さらに厨房とボイラーに連続している。同様に、全体の機能配置と煙突の関係、暖炉の形状、インテリアの内装、装飾などについて、その特徴を実測・観察によって分析する。これらの活動を学生と共にし、その結果を、護摩法要の儀式・仏具と照合する。現在、遠藤が重要な意味を持たせたと考えられる装飾が塔から失われており、歴史文化遺産の観点からも、実証した

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
3. 甲子（きのえね）プロジェクト—シンボル・マーク・打出の小槌の意味と背景	単	2016年4月～	武庫川女子大学 生活美学研究所 甲子プロジェクト 特別経費	甲子園ホテルのシンボルマークは、通常のように食器・パンフレットなどに使われるだけでなく、様々なバリエーションで建築に取り付けられている。他に類をみない建築装飾の意味と背景を、地域の社寺にまつわる信仰・エピソード・1930年前後の歴史的出来事・新聞記事などにみる市民の生活に探る。
4. 日本の農業6次化が都市家庭の食生活に及ぼす影響に関する研究	単	2015年4月～2016年3月	株式会社JFC	2013年と同様の趣旨で、北海道と鹿児島県の農地を調査し、資料を収集
5. 甲子園ホテルにおける遠藤新の設計理念と方法	単	2015年4月～2016年3月	平成27年度科研費学内奨励金	遠藤新の造形における理念・方法を読み取るための資料作成。甲子園会館の西ホールとロビーを実測し、CAD化する。
6. 豊中市における「ふるさと納税」に係る返礼品の設定	単	2015年2月～2016年6月	豊中市	豊中市が、2016年度から開始するふるさと納税の返礼品について、企画・提案する。授産施設で制作すること、豊中らしさを表現すること、今後商品として販売できる可能性があるものなどの条件に対するものである。
7. 日本の農業6次化が都市家庭の食生活に及ぼす影響に関する研究	単	2013年9月～2014年3月	株式会社JFC	カット野菜の生産過程を消費者に分かりやすく紹介する。そのための、現地調査および資料の収集
8. エコグリーン北海道の「ごぼう」と「ながいも」のカートンデザインの提案	単	2011年4月	株式会社神戸物産	2011年度、北海道の農地から始めて収穫するジャガイモ、ナガイモ、ゴボウのカートンをデザインする。国産品・豊かな自然・安全安心などを表現する。
9. 基盤研究（C） 継続	単	2009年	日本学術振興会科学研究費	パトリック・ゲデスの都市論における女性の生活像
10. 基盤研究（C） 継続	単	2008年	日本学術振興会科学研究費	パトリック・ゲデスの都市論における女性の生活像
11. 基盤研究（C） 新規	単	2007年	日本学術振興会科学研究費	パトリック・ゲデスの都市論における女性の生活像

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2017年11月2018年2月	日本生活学会投稿論文の審査
2. 2017年10月2018年2月	日本インテリア学会投稿論文の審査
3. 2014年4月1日～	日本建築学会協力委員
4. 2013年3月2日	BS朝日番組「甲子園ホテルの想い出—二人の天才の物語・遠藤新とF.L.ライト」出演
5. 2012年4月1日～	日本建築学会近畿支部建築論部会コアメンバー
6. 2012年4月～2013年12月	第4次西宮市総合計画・中間見直しに係る学識経験者懇談会
7. 2008年7月1日～2012年6月30日	西宮市都市計画審議会委員